

相手や味方との「関係性」の中で、身体が自ら形を変えていく

体育科の授業では、相手の得点を阻止しようと動く A さんの姿がありました。最初はボールを持つ子と受ける子の間に立っていた A さん。しかし、ボールはその頭上をふわっと越えていき、得点を許してしまいます。ここで活動を止めず、次の守備シーンでは、A さんは中間に立つのではなく「ボールを受取る子のすぐそば」へ陣取り、見事にボールをはじき返します。さらに A さんの学びは攻撃へと続いていきます。最前線のフリースペースに身を置いてパスを待ちますが、味方の投げる子の腕力が足りず、ボールが届きません。その時、味方から「そこまで投げられるか分からない！」という声が発せられました。そこで A さんは「フリースペースを維持する」という主観的なこだわり（具体的スキーマ）を持ちつつも、その場の状況に合わせて「味方の方へ少し距離を詰める」という自己調整を行いました。結果、見事にパスを受けて得点へと至ります。



「この作戦で阻止できた」「この立ち振る舞いでつながった」という成功経験の積み重ねは、認知スキーマ（具体的スキーマ）の構築そのものです。しかしそれ以上に価値があるのは、「この方法はうまくいかないぞ」「こうすればつながるかも」と、相手や味方の身体的特徴という「状況」に深く埋め込まれながら、臨機応変に自分の動きを更新していくプロセス（＝ゆらぎ）にこそあるのだと思います。

日常の見立てから「数学的な美しさ」へ



2年生の算数の授業。木村の見立てですが、発達段階上、この時期の子供たちに図形を提示すると、図形の組み合わせを「お家」や「ロケット」など、具体的な何かに見立てて遊ぶ日常的なスキーマ（基礎的スキーマ）が強く働くことを予想していました。しかし、授業者の精緻なアプローチや環境デザインがそうはさせませんでした。プリントのドット（格子点）をあえて少なく制限する仕掛けを施し、子供たちへ「しきつめましょう」と働きかける授業デザインによって、子供たちの「わきおこり」の質がガラリと変わったのだと思いました。子供たちは、図形を具体的な何かに「見立てる」世界から一歩抜け出し、「どうすれば隙間なく敷き詰められるか」という、図形そのものが持つ規則性や構成要素（辺、角、頂点）に没頭し始めました。ひたすらに様々な図形をプリントに書き込み、手を動かし、具体的操作を繰り返す中で、「図形を回転させる」「裏返す」といった感覚が研ぎ澄まされていきました。

子供が成長の最前線へ身を置くということ

子供たちが、思い通りにいかないもどかしさ（ゆらぎ）に直面し、それでも仲間の助けや教材からのアフォーダンスを手がかりにしながら、「もう一回！」「どうすればいい？」とちょっぴり背伸びをしているその瞬間こそが、「今できることを超えようとする成長の最前線」に身を置くということなのでしょう。そして、そのような学びを共創してこそ、本校が目指す「心の豊かさ」と「実行力」が育まれていくのだと思っています。

（木村 仁）